

# 将来像 住民とともに描く

## 佐々木亮平さん

で保健師 助保男性 看護の 大初 秋田 赤手 日岩

東日本大震災の津波で壊野を超えて集まり、情報を減的な被害を受けた岩手県共有し、まちの将来像を描陸前高田市。年の瀬も迫った先月26日、内陸寄りにあり津波を免れたコミュニティセンターでは、秋田市の日本赤十字秋田看護大助教で保健師の佐々木亮平さん(36)ら、被災者の医療や保健福祉に関わる専門家やNPO、行政担当者らが60人以上集まり、活発な意見交換が行われていた。

「(仮設住宅などで)サロンを開いても男性の出席者が少ない」「体操教室を続けているが、若い人や男性も参加してくれる」「遺族の相談を受け付けている。利用を進めてほしい」。参加者らはそれぞれ活動の現状や課題を報告した。この集まりは、現場対応に追われがちな関係者が分



## 陸前高田は「第二の故郷」

って「第二の故郷」だと言

震災では当時の同僚保健師9人のうち6人が犠牲になった。「被災地の苦しみ

が分かる。つらいが悲しんでいる暇はなかった」

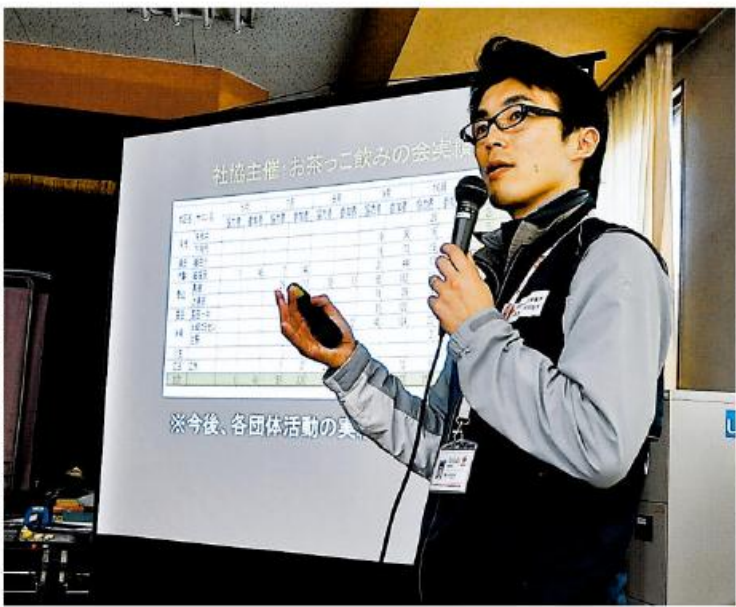
は「亮平さんに誘われたから参加した。この会議を積み重ねて復興へ前進したい」と話す。

佐々木さんの元上司で、陸前高田市健康推進課の菅野道弘課長は「亮平さんは内からも外からも見られる人。たくさんの団体が入ってくる中で何が必要かを理解している」と評価。包括ケア会議をともに引っ張ってきた東京都千代田区のヘルスプロモーション研究センター長で医師の岩室紳也さん(56)は「さまざまな立場の人が会議に参加しやすい雰囲気を作っている。佐々木さんは、絆作りの名人」と話す。

佐々木さんは大学の業務の合間を縫って陸前高田に通う。秋田に戻っても細かな連絡が絶えず入り、多忙を極めるが、「定期的に被災地に入ることで、みんなが立ち止まって時間を共有し、将来を考える時間を持つれば」と話す。

「震災で改めて人と人との関係性を考えさせられた」という佐々木さん。「一人一人が住みやすい町」を住民とともに作り上げるのが願いだ。

スクリーンにスライドを映しながら、会議を進める佐々木亮平さん。岩手県陸前高田市で



【小林洋子】